

【教育目標 夢中になる とともに創る】



きらきら

新潟市立沼垂幼稚園
園だより
令和7年2月28日発行

その一瞬の子どもの思いや願いを捉え、達成感を支えていく

園長 青木博子

年少組の生活発表会がありました。当園の発表会は、この日のために練習して完成されたものを発表するのではなく、学級での子どもたちのありのままの様子を見ていただくものであることは、何度かお話ししてきたとおりです。興味・関心をもったこと、もの、大好きな遊びや歌や絵本など、子どもがこれまでに経験してきたことが、すべて生活発表会当日の遊びにつながっています。

うさぎ組は「へんしんトンネル」のお話遊びでした。トンネルを通ると動物などに变身して、お散歩したり、鬼ごっこしたり、かくれんぼしたりして遊びます。なりたいものも遊びも毎日変わります。かくれんぼしていたら、ずっとかくれていて、なかなか出てこない子どもがいました。お昼寝しているのですね（演技ではなく遊びです）。友達が「おいでー！」と言っても、ぐっすり眠っています。お腹がすいた子どもたちはみんなでカレーを作ることになりました。おいしいカレーができたその途端、一人の子どもがカレーをもって、お昼寝しているお友達のところへ行き、「どうぞ！」と差し出しました。すると、お昼寝していたその子がむくっと起き上がり、みんなのところに戻ってきました。みんなで一緒にカレーを食べて「おいしかったね！」と大満足でした。



それは、年長児が見に来てくれた時のことでした。初めて大勢の人を目の前にして、「恥ずかしい」気持ちから、「へんしんトンネル」から、一步踏み出せない子がいました。ねこになった、その子どもはトンネルをくぐろうとしますが、一步が踏み出せず、「先に行って」と友達に譲りました。その様子を見ていた担任は明るく言いました。「こんなにかわいい猫ちゃんなんだから、みんな、びっくりすると思うわ」。するとねこになった子どもは、こくりとうなずき、意を決してトンネルをくぐりました。そして「にゃん！」と鳴きました。それを見た年長児が「ねこちゃんだね！」。すかさず担任が「ウインクも上手なのよ！」という、ねこになった子どもは、かわいくウインクして見せました。



恥ずかしさから一歩出られなかった3歳児のその子どもは、担任の励まして自分から一歩踏み出すことができました。自分の力で一歩踏み出せたからこそ、達成感を味わい、それが自信になるのです。

りす組は「てぶくろ」のお話遊びです。おじいさんが森の中で手袋を落としてしまいます。そこに、わいの大工さんがやってきて、のこぎりで木を切ったり、金づちでとんとんしたりして、はしごを作り、手袋のおうちに入るといってお話です。ジャンプの得意なかえるさんや、くろうさぎさん、元気なクマさんも、次々と仲間になり、おうちに入ります。なりたい役はその日によって変わったり、新しい役になったりします。Aさん（自分）がAさんのまま、仲間入りすることもあります。「いれて」「いいよ」「どなたですか」などの言葉のやり取りを楽しみながら、ひとり、またひとりと仲間になり、おうちに入ります。子どもたちは、みんなで一緒におうちにいることが楽しくてたまらないのです。



担任は、手袋のおうちの中に一緒に入り、一人一人の子どもの言葉や動きを受容し共感しながら受け止めることで、子どもはみんなで一緒にいることの楽しさを味わったり、興味・関心をもった遊びを楽しんだりしています。さらに、担任は、子どもが思いを言葉にできないときは、そっとそばに寄り添い、子どもと一緒に「いれて」と言うこともありました。また、ある時、おうちの中で、大工さんがおいしいごちそうを作って、みんなにふるまいました。すると、その様子をじっと見ていた満3歳児の子もごちそうを作り始めました。そして、うれしそうにそのごちそうを近くにいた担任に差し出しました。ありがとうございますとごちそうを受け取り、そっと担任は遊びをつなげたのでした。



その一瞬一瞬の子どもの思いや願いを的確にとらえ続ける担任たちが、年少組の子どもの達成感を支えています。その中で、どの子どもにも「自分のやりたいことを自分の力でやろうとする。やり遂げた充実感を味わう力（自立心）」が育まれています。その自信を一つ一つ積み重ねていき、満3歳児、3歳児は確実に自立へと向かっています。

